

国境をこえて

日本から遠く八〇〇〇キロメートルもはなれたパキスタンと、アフガニスタンの国境近くに、ペシャワールという町があります。この町を中心に、アフガニスタン・パキスタンの二つの国で活やくする福岡出身の医者があります。名前は、中村哲さん。

中村さんがパキスタンを訪れた一九八三年ごろ、となりの国、アフガニスタンでは内戦があり、戦いをのがれて、三百万人以上もの人々がパキスタンに入ってきていました。爆撃で村が破壊され、やっとの思いで国境にたどりつく人々や、逃げてくるとちゅうで飢え死にしたり、弱って死んでしまったりする人々が多くいたそうです。中村さんは、これらの人々の治療にあたりました。





これらの国の山岳部には、病院もなく、医者もおらず、町の病院まで出てくることは難しいことでした。患者が病院まで来られないのなら、医者の方から出かけて行こうと、中村さんたちは山岳部に入り、診療所をつくったのでした。

二〇〇〇年六月、中村さんは、診療所の建て直しのために、

アフガニスタンの山岳部に来ていました。そこには、治療

を待つ人々の長い列があり、

中には待っている間に死んで

いく幼い子どもをかかえ、と

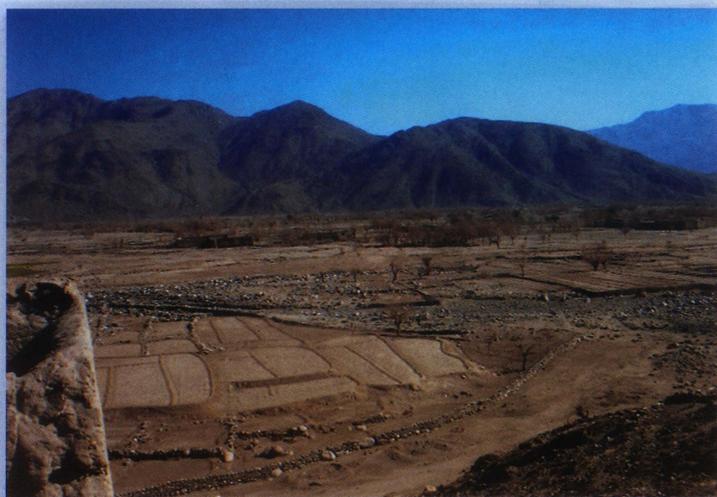
ほづにくれる若い母親の姿もありました。

いつもの年なら、六月は田植えの季節ですが、水田どころか、行けども行けども干からびた地面と水のない川

が続いているばかりでした。飲み水でさえも不足し、汚

れた川の水を飲むことで赤痢などの伝染病が流行したり、

れた川の水を飲むことで赤痢などの伝染病が流行したり、



干ばつのために砂漠化した村

井戸掘りの作業



水がないことで体を洗うことができず、皮膚病が増えたりして、子どもたちの命は次々にうばわれていました。

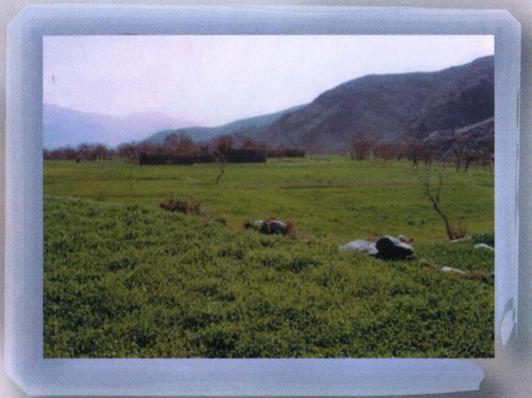
この様子を見た中村さんたちは、『水さえあれば、赤痢や皮膚病で子どもたちの命がうばわれることはないし、干からびた田畑もうるおい、作物も育てられる。治療よりも命があることが先だ。』と、アフガニスタン各地で、中村さんたちの呼びかけに集

まったボランティアの人々や現地の人々と共に、井戸を掘り始めました。二〇〇一年までに掘った井戸は六〇〇ヶ所にもなり、今後は、一〇〇〇ヶ所の井戸を掘る計画でした。

しかし、二〇〇一年九月のニューヨークでのテロ事件をきっかけとして、アメリカ軍によるアフガニスタンへの空爆が始まりました。干ばつの被害の上に、爆げきによる被害が重なったのでした。そのため、以前から問題だった食糧不足が、さらに深こくになりました。そこで、



完成した井戸



緑ゆたかになった砂漠の村

中村さんは、アフガニスタンの人々を何とか救いたいと、日本とペシャワールを歩き来しながら、日本各地でアフガニスタンの様子をうったえ、募金をよびかけました。このよびかけにたくさんの募金が集まり、アフガニスタンの人々への食料配布が実現したのでした。

『人権の中でも最も重要なものは、生きる権利である。』と、中村さんは言います。わたし

たちには当たり前になっている、この生きる権利でさえもおびやかされている地域が、世界中にはまだいくつもあります。この生きる権利—命—を守る活動が、たくさんの人々の善意と共に、今、アフガニスタン・パキスタンの二つの国で、国境をこえて広がっています。



講演する中村さん

写真提供 ペシャワール会